





★本の作成にあたって★

- ・ コンテストお題イラストは、表紙、挿絵、巻末など、作成した本のどこかに残すようにしてください。
- ・ 表紙には、画像内、または本の編集ページ内の「表紙をつくる」機能でタイトルを記載してください。
- ・ 規定ページ数は20ページ以内（表紙・お題イラストは含まない）ですが、文字数に制限はありません。（文庫本を基準とした場合、600～700文字以内が目安です）

【募集作品】

コンテストお題イラスト5点のいずれかを題材にした、20ページ以内の「小説」「マンガ」「エッセイ」「詩」など、形式を問わないオールジャンル作品（18禁作品を除く）。

日本語、未発表、作者オリジナルの作品に限ります。

【応募方法】

- ①コンテストお題イラストからN次創作をおこなってください。
- ②お題イラストのN次創作本を公開する際に表示される、「コンテスト応募フォーム」に入力してご応募ください。

※forkNへの会員登録が必要です（無料）

【応募資格】

- ・ forkN会員であること。
- ・ 年齢、職業、国籍、プロアマ問いません。

【商品】

大賞1名 賞金10万円／スマートフォン書籍アプリ化佳作3名 賞金1万円／スマートフォン書籍アプリ化forkN賞1名 Amazonギフト1万円分／スマートフォン書籍アプリ化

【募集締め切り】

2012年7月31日

【審査結果発表】

1次審査発表 8月20日（月）

結果発表 9月3日（月）

【注意事項】

- ・ 応募締め切り時点での作品を評価の対象と致します。また、締め切り後は、誤字修正以上の大きな更新はなされないようお願い致します。
- ・ 受賞作品は、結果発表後1か月間の公開（無料）をお願い致します。
- ・ ペンネームは、受賞発表や宣伝のために使わせていただく可能性がございます。
- ・ 結果は応募フォームに入力いただいたメールアドレスに通知致します。
- ・ 作品の著作権は作者に帰属しますが、応募作品、ペンネーム、作品コメントが、審査結果の発表、本サイトのPRなどのため利用される場合がございますこと、あらかじめご了承ください。
- ・ その他、コンテストにかかわるお問い合わせは[こちら](#)からお願い致します。

果てしないわ、と未明は呟いて机に突っ伏した。手にした時間割が調理台の上を低空飛行して、銀色のボウルの横へひらりと不時着した。高校生になったばかりの5月、未明は輝かしい高校生活を前にしてすでに挫折しそうになっていた。初めての学年テストで、数学の点数がすこぶる悪かったのだ。32点。30点から下が赤点だから、2点だけ、彼女は助かった。料理に例えると、塩一つまみというところだろうか。隠し味程度の点数が、未明の命綱だ。最初からこれでは、今後の未明の成績も知れている。

「落ち込む暇があるなら、さっさとテストの直しをして、こっちのカップケーキを作るの手伝ってよ」

中学の頃から友人の緑が、テスト用紙を頬にくっつけて打ちひしがれている未明を呆れ顔で眺めている。

「緑ちゃん、数学のテスト何点だった？」

「95点」

「……追い打ちをかけないで！ このっ……、緑ちゃんのが天才！」

「聞いたのはあんたでしょうが、お馬鹿ちゃん」

お馬鹿ちゃん、と呼ばれても未明はぐうの音も出ない。その通りすぎるのだ。

高校の時間割には、数学ⅠとAが一週間に6コマもあった。毎日というわけではなく、木曜日には、数学Ⅰと数学Aが2時間あるのだ。絶望的だった。6時間×4＝24コマ。それが1年続くと……未明は計算も苦手だから、とにかくたくさん、数学の授業があることが分かって泣きたくなくなった。

明日までにテストの答えを訂正して提出しなければならないので、未明は所属する家庭科部の時間まで使ってこうして勉強をしている。

「a bの係数が-1の時……」

忌々しい呪文のように問題文を読んでいると、調理室の窓の外が騒がしくなった。外の水飲み場に、陸上部の生徒が休憩に来たのだ。

調理室から漂う甘い匂いに誘われて、誰かがお腹空いたと叫んでいる。

「何作ってるの？」

窓から身を乗り出して来たのは、青のラインの入ったジャージを着ている3年の男子生徒だった。未明はちょうど窓のそばに座っていたから、慌てて背を向けて、テスト用紙を隠すようにして点数の部分を三角に折り曲げた。

「チョコチップのカップケーキよ」

「えー、いいなあ。俺たちの分はないの？」

「ないね」

同じ3年生の香織先輩が意地悪く笑うと、彼らは悲痛な声を上げて窓枠に肘をつく。

「ね、それ、答え3だよ」

急に、男の子の声がして、未明は振り返った。そこには、未明の答案用紙を指差している、ふわふわした

髪の毛の男子生徒がいた。眩しいくらいの笑顔だ。

「……サン？」

「俺、目が良いんだよね。式を展開すると、答えは3」

未明がびっくりして固まっていると、香織先輩がふっと笑う。

「星一は目だけじゃなくて、頭も良いでしょうが」

「頭は普通だけど……」

「学年トップが言うと嫌味にしか聞こえないわ」

ふわふわの髪の毛をした男の子は、そう言われてはにかんだ。学年トップ……、それは、未明とは天と地ほども差がある学力ということだ。悲しくなっていると、星一と呼ばれた男の子は、ひょいと窓枠を乗り越えて未明の隣に座った。日向と汗と土ぼこりの匂いがする。未明はオドオドしたまま、いきなり隣に来た彼をまっすぐ見つめた。

彼はさっきの優しい笑顔のまま、未明の答案用紙を覗き込む。

「ねえ、この問題、全部俺が教えるからさ、カップケーキ、いっこくれない？」

「ずるい！ 星一だけ抜け駆けしてる」

水飲み場で他の男子が騒いで、彼はそれをうるせえ、と一喝した。

「だって俺、生徒会で昼メシ抜きだったんだもん！ お腹減って、もう走れないよ」

情けない声のまま、彼は未明にお願い、と手を合わせた。柔らかいはちみつ色の髪の毛と人懐っこい笑顔に、未明はあっと思い出した。彼は入学式の時、在校生総代で挨拶をした生徒会の先輩だった。頭脳明晰、運動神経抜群の、たしか、

「王子様？」

未明がうっかり口に出してしまうと、周りはげらげら笑い出した。未明がそう言ったのではなく、新入生の間で噂になっていたのだ。この高校には、何でもできちゃう完璧な王子様がいると。彼は恥ずかしそうに、髪の毛をぐしゃぐしゃさせて笑っている。

「何それえ、俺、王子様なんかじゃないよ。空腹で可哀相な少年だよ」

彼の照れる仕草や、先輩達の反応から、王子様というあだ名はからかい半分のものだというのが分かった。未明も恥ずかしくなって、赤い顔をして俯いた。彼はそれでも気にせずに、シャーペンを手に持って、余白へ公式を書きつける。

「 $(a + b)$ の2乗……っと、これ、展開の基本公式だから、覚えたら簡単だよ」

彼の言った通りに、未明は展開式を解いていった。分からないところは丁寧に式を教えてくれて、未明はあっという間にテストの直しを完成させることができた。

「あ、ありがとうございました」

感動しながらお礼を言うと、彼はニッと笑った。

「どういたしまして」

未明は今日、調理に参加していないから、緑に文句を言われながらも自分の分のカップケーキを手渡した。いっこだけ、と言われたところを、袋には2個入れた。

「ありがとう！ これでどこまでも走れるよ」

彼は心底嬉しそうにそう言うと、カップケーキをかじりながら、また窓からグラウンドへ去って行った。まるで春の風と同じだ。さっと通り過ぎていった後、人に暖かい気持ちを残していく。未明は淡く色づく気持ちを、星一の後ろ姿に感じた。

次の日、登校する未明の足取りは軽かった。数学のテストの直しが完璧なのもあるが、数学の課題も、星一のおかげで最後まで解くことができた。高校生活のほとんどは、未明の嫌いな勉強でできているようなものだから、それが上手くいくと、学校へ行くのはうんと楽しいものになる。

昇降口でローファーから上履きへ履き替えていると、遠くの三年生の下駄箱にふわふわの髪をした男の子を見つけた。星一だった。でも、未明は何だかぎゅっと胸が苦しくなって、恥ずかしくて、パッと目をそらすと教室へ向かった。

男の子、しかも先輩となんて、未明はまだ仲良く話すことができなかった。周りは、誰を彼氏にしたいとか、どの先輩がかっこいいとか、いわゆる恋バナで盛り上がっている。未明だって、恋バナは楽しい。恋だっていつかはしてみたい。けど、いざ男の子を目の前にすると、意識しすぎてしまって、もじもじしてしまうのだ。

教室までの廊下を歩いていると、ばたばたと足音が追って来て、未明の肩を叩いた。

「おはよう！ キミ、これ、落としたりよ」

走って来たのは星一だった。手にはなぜか、未明が鞆につけていたはずの黄色のティディベアを持っている。星一に気を取られていて、落としてしまったことに気付かなかった。

「あ、ありがとうございます」

「はい。これ、カワイイね」

「……自分で作ったから、キーホルダーのところが取れちゃったみたいです」

カワイイ、がクマに言われた言葉だとしても、未明の頬はほんのり赤くなる。そんな未明の気も知らず、彼は目を丸くしてティディベアを眺めていた。

「うそ！？ これ、自分で作ったの！ 本物みたいなのにすごいね。あ、本物って、本物のクマみたいってことじゃなくて、売り物のヌイグルミみたいってことだけだ」

星一はティディベアのお腹を押したり、耳をいじったりしている。未明が唯一得意なのは、裁縫と料理だった。それ以外はてんでダメなのだ。特に、勉強。その中でも数学。もちろん、体育だって苦手で、でんぐり返しすらできない。

チラリと見上げる彼は、皆が噂する王子様だ。未明は自分と星一を比べて溜息をついた。

気取ったところのない、何でも得意な王子様。かたや、得意なことは料理と裁縫しかない女の子。まるで自分は、王子様のいるお城に仕えるメイドのようだと、未明は想像して笑ってしまう。

――先輩と私じゃ、全然釣り合わないな。

そう考えて、慌てて首を振る。今、自分は何を考えていたのか？ まるで、彼と付き合いたいと思っているような考えをして、未明はドキドキしてしまう。

「先輩、昨日は、数学を教えてくれてありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ、カップケーキをありがとう。おいしかったです」

深々と頭を下げ合って、星一は微笑んだ。未明は、自分の作ったカップケーキを星一にあげたかったと悔

しくなった。自分の作ったお菓子で、おいしいと、微笑んでほしくなった。

「星一！ お前、どこ行くの」

星一の友達だろうか、後ろから男の子が彼に声をかけた。

「おはよ、俺、図書館に本を返してくるから、先に行つてて」

「おう、分かった」

見れば、星一は片手に本を何冊も抱えていた。未明は読書も嫌いだ。本を読むなんて、三分で睡魔に負けてしまう。また一つ、彼と違うところを見つけて未明は悲しくなった。

そんな未明の気持ちも知らず、星一はにこにこしている。

「キミ、名前は何ていうの？」

「小泉……未明」

「みめい？ どんな字？」

「未来が明けるって書きます」

「小泉八雲の小泉と、小川未明の未明だ。文学的な良い名前だね」

彼は未明に分からないことを言って感心している。誰ですか？ と未明は聞けなくて、その変わり、もう知っていることを尋ねた。

「先輩のお名前は？」

「俺は野原星一。野原しんのすけの野原と、星新一から新しいを抜いた名前だよ」

「クレヨンしんちゃん？」

未明が言うと、星一はピースサインをした。

「うん！ また、カップケーキよろしくね、おねいさん」

彼はクレヨンしんちゃんの声真似をして、未明へ背中を向けて図書館へ歩き出した。全然似ていない、ただの鼻声だ、未明はおかしくなつてクツクツ笑った。彼の背中が恥ずかしく縮こまっているのを見て、また笑って、未明はティディベアをぎゅっと握りしめた。太陽みたいな人だな、と、未明の心まで晴れわたった。

授業中、未明はこっそり携帯電話を開いて、小泉八雲と小川未明と星新一を調べてみた。全部が小説家の名前だった。小泉八雲は日本人ではなく外国の人だったし、小川未明は女だと思っていたら男だった。星新一は、SF作家だった。彼のおかげで、未明は自分の名前が不思議を帯びた気がした。初めて、本を読みたいと思った。

数学もそうだ、嫌いだったものが、星一を通すと好きに変わる。彼の背中からは、未明を楽しい世界へ連れて行ってくれる。

「あれ！ 今日はお菓子じゃないの！？」

火曜日と水曜日と金曜日、家庭科部は活動しているが、いつもお菓子などの調理をしているわけではない。今日は裁縫の日だった。皆それぞれミシンをかけたリパッチワークをしたりしている。未明はその時、2つ目のティディベアを作っていた。ピンクのフェルトのパターンをチャコペンで引いて、ハサミで切っているところだった。

落胆した星一たちの声が教室に響いて、未明も思わずがっかりした。小麦粉と砂糖にバター、卵くらいなら冷蔵庫に常備してある。今からでも間に合うのではないか。

「香織先輩、今からカップケーキを作りましょう！」

未明がミシンをかけている先輩の腕を掴むと、彼女は鬱陶しそうに首を振った。

「いやあよ。何であいつらのためにお菓子を作らなきゃいけないの」

「お菓子をくれなきゃイタズラするぞ！」

ジャージの男の子が叫ぶと、星一も同じように叫んで笑う。未明は、彼にならイタズラをされてもいいと思った。星一が何か冗談を言うと、周りが和やかになる。突然、香織先輩がミシンを止めて、未明を窓のそばへ引っ張っていった。

「ちょっと、何ですか！？」

「おい、ハラペコいもむしども。このいたいけな後輩に、イタズラできるもんならしてみなさい」

彼女は家庭科部の部長のくせに、男前なのだ。汗くさい男の子たちは、めいめいに顔を見合わせて後ずさった。

「ごめんなさい」

「邪魔してすみませんでした」

「ごめんね、未明ちゃん」

星一に名前を呼ばれて、未明は顔が熱くなるのを感じた。俯く未明を見下ろして、香織先輩は豪快に笑う。

「見て見て、未明ちゃん。王子様がしっぽを巻いて帰ってくよ、意気地がないね」

そう言った先輩の目は、未明の気持ちを見透かして笑っている。お菓子を作ってもいないのに、あたりは何だか甘い匂いがした。

ピンクのティディベアはその日のうちにできあがった。鞆にぶら下がる黄色のティディベアの横に並べた。未明はカップルになったティディベアを眺めて、一人照れた。何だかそこに秘密の恋心が寄り添っている気がして、鼓動が速くなる。

緑と一緒に連れだって校舎を出ると、正門のところへ自転車を止めた、見慣れた星一の姿があった。振り返った彼と目が合って、星一は軽く手を上げた。未明も同じように振り返る。自分の後ろ、ロータリーには誰もいない。今度は緑を見上げた。彼女も同じように未明を見て、それからしたり顔をしてみせた。

「先輩、未明に用事があるんじゃない？」

「えっ、え、私？」

緑は早合点したように、未明の背中を押して、走って帰ってしまった。一人残された未明は、それでも前に進むしかなくて、正門に辿りつく。

「お友達、もしかして帰っちゃった？」

星一のそばへ寄ると、緑の姿はもう見えなくなっていた。頷くと、彼はごめんねと呟いて頭をかいた。五月の夕方は夏を含んでいて、しっとりしていた。水っぽい木の花粉の匂いがする。王子様は黙っていると、普通の高校生に見えた。顔のきれいな、意気地のない男の子だ。それに未明は安心して、黙っている彼に微笑んだ。

「あのさ、未明ちゃんに頼みたい事があって」

彼はようやく口を開いて、いつものように人懐っこい笑みを浮かべた。

——あ、王子様に戻っちゃった。

彼は笑うと、王子様に変身する。

「何ですか？」

「キミ、そのクマのぬいぐるみ、自分で作ったって言ったよね？ その作り方を、俺にも教えて欲しいんだ。男が裁縫なんて笑うかもしれないけど、そのクマをあげたい人がいて」

それを聞いて、ぴーん、と未明の頭のとっぺんにあるセンサーが赤いランプを点滅させた。いわゆる女の勘というやつだ。まだまだ子供の自分にも、そんな高精度のセンサーが付いているなんて未明は驚いた。ちょっとだけ照れたように目を伏せる彼が、手作りのティディベアをあげたいと願う、その相手はきっと彼女だろう。王子様には、お姫様がいます。童話では当たり前のことなのに、すっかり忘れていた。

未明はぐらぐらする心が折れてしまわないように、ぐっと唇を噛んで、それから言った。

「いいですよ。簡単です、クマ、作るの」

「ほんと？ ありがとう！」

ぱっと表情が明るくなった星一は、名前の通り星みたいにきらきらしていた。ああ、と未明は堪えきれなくて、切ない溜め息をついた。

最初から分かっていたことだった。お星様と、未明。まだ明けない自分。炭酸水の泡がしゅわしゅわと消えていくように、恋ははじめて、ただの甘い感情になる。未明はそれを、そっと飲み込んだ。

ティディベアを作るのは、二人とも部活のない木曜日の放課後にした。星一は八月にインターハイに出場するし、生徒会の仕事もあって忙しい。だから週に一回。場所は図書館の隅にあるテーブルだ。そこは四方を哲学書や辞典が詰まった本棚に囲まれていて死角になっている。

未明がそこへ行くと、星一はもう椅子に座っていて、真剣な眼差しを本に落としていた。その口元が幸せそうに緩んでいる。彼は本当に読書が好きなのだ。未明はしばらく彼の姿に見とれて、はっと我に返ると深呼吸をしてそばに寄った。

「星一先輩、こんにちは」

「あ、未明ちゃん。こんにちは」

二人で丁寧に頭を下げる。

「よろしくお願ひします、未明先生」

「先生はやめて下さい」

「でも、俺は教えを乞う立場だから……って、おかしいね。キミと話していると、かしこまっちゃうよ」

未明が裁縫セットを広げていると、彼はそう言って笑った。

「緊張すると、上手くしゃべれなくなるの……」

未明は正直に伝えた。星一はきょとんとして、それからぱちぱちとまばたきをした。

「俺に緊張したっていいことないよ、だって、しんちゃんだし」

「……似てない」

「そう、似てない。アハハ、でも、分かるよ。俺も、生徒会で前に立つ時、緊張してすごくおかしい敬語を使ったりするもん。武士みたいとか言われるでござるよ」

星一は誰かを和ますのが上手だった。だから、陸上部で走っている時でも、廊下で見つける時でも、いつも友人に囲まれている。未明に対しても、こうしてやすやすと緊張をほぐしてしまう。

未明も笑顔になって、テーブルの上へ布やフェルトを並べた。

「へえ、いろんな布があるんだね」

「どんなティディベアがいいですか？」

「うーん、可愛い感じのにしたいな」

「……誰にあげるんですか？」

思い切って尋ねてみると、星一は曖昧な表情で微笑んだ。寂しいような、それでも嬉しいような、マーブルの気持ちが透けて見えている。

「大切に……したい子」

星一はそう言って笑う。大切にしている子、ではなく、したい子。もしかして、星一も誰かに片思いをし

ているのかもしれない。王子様なのだから、もっと自信を持てばいいのに。未明はそう思うが、口には出せなかった。敵に塩を、ではなく、ライバルにティディベアを贈る、未明の気持ちだって複雑だ。

星一はピンクの花柄の布を選んだ。未明はオレンジのフェルトにする。

「型紙を布の上に置いて、チャコペンで写し取って下さい。あとは切って、縫って、綿を入れるだけです」

「ううん、簡単に言うなあ」

本当に簡単なのに、と未明は思う。裏返しにした布へ、葉っぱのようなバナナのようなタマゴのような形の型紙をぽんぽんと置いて行く。それをチャコペンでなぞる時、布が寄らないようにピンと手のひらで押さえなければならない。

「ほら、もう俺、この時点で難しい……」

「そうですか？ 困むだけですよ」

星一は未明の2倍の時間をかけて型紙を写し取ると、ゆっくりゆっくりハサミを入れた。一つ一つが慎重で丁寧だった。きっと、彼は何をやるにもその態度なのだろう。だから、基本が身について、何でもできるようになってしまうのだ。

未明は感心して、切り終えた布を立体に組み立ててマチ針を差していく。

「あとは、返し縫いで縫います」

「カエシヌイ？」

「えっと、後戻りのように針を刺す縫い方です」

針へ糸を通し、未明は見本を見せてあげた。じっと見つめる星一の視線がこそばゆくて、指の先が細く震えてしまう。

「こうして、布をすくって……裏から見ると、糸が重なっているのが分かりますか？」

「おお、すごい！ こうすると、丈夫に縫えるんだね」

「そうです。綿が飛び出してしまうと、可哀相だから」

「内臓が出ちゃう？」

「そうです、スプラッタです」

二人で笑い合って、ちくちくと針を動かした。星一はもともと器用なのか、なかなか綺麗な形に縫えている。

「すごいですね、先輩は、何でも上手にできちゃうんですね。……私とは違って、完璧な人」

未明が溜め息を漏らすと、彼は、王子様と呼ばれた時にみたいに、大げさに首を振った。

「僕なんて全然、完璧じゃないよ」

わざとらしい謙遜でもない、本当にそう思っているような言い方だった。

どんなに素敵に見える人でも、コンプレックスはある。未明だって知っているつもりだ。でも、彼にそれがあるようには思えなかった。思えないからこそ、未明に向ける儚げな笑顔が気になった。

星一はティディベア作りのお礼に数学を教えてくれた。

「鋭角の三角比は簡単だよ。三角定規を二枚出して、この直角三角形は角度が 30° 、 60° 、 90° 、 45° 、 45° 、 90° となっているよね？」

「……はい」

「ん、忘れてるな？ 三つの角度が 180° になるようにして……」

基礎から教えてくれる星一の授業は分かりやすかった。未明が抱いている数学の苦手意識をなくすように、時々、遊びを取り入れてくれる。白い紙にコンパスと定規で円や線を引く。

「例えば、直線に垂直に二等分される正方形を作図する場合、直線上に中心Oを持つ円、ここが点A、Bとして、弧A-B、B-A……」

そうしてできあがるのはいつも、花のような幾何学模様だった。

「わあ、刺繍のパターンみたいですね」

「美しいでしょ。こうして見ると、数学も悪くないよね？」

「はい、本当に。何だか楽しいものに思えてきます」

この花模様をパッチワークを縫いつける時に使えば、素敵な作品になるだろうと思いつく。苦手だった数学が、未明の好きなものに姿を変える。星一はコンパスを置くと、ふっと微笑んだ。

「僕も、家庭科は苦手だったんだ。男だし、得意な人の方が珍しいかもしれない。でも、こうして未明ちゃんに教わって、すごく楽しいと思った。コツコツ縫物をするのは、俺に向いているかも。前、未明ちゃんは、俺が何でもできる人って言ったけど、それは、俺がこうやって何でも楽しくできちゃうからだと思う。単純な脳みそなの」

星一は軽く言ったが、それこそが頭の良さなのだと思はれる。

ティディベアは着々とできあがっていく、未明の気持ちと同じように。

紫陽花が雨に滲んで、溶けていくみたいだった。六月の雨は細かくて、すべてをもやもやとした白い霧に包んでしまう。

未明と星一はこっそりクッキーを食べて、ぼんやりと窓の外を見ていた。

「おいしいね、このクッキー。くるみが入ってる」

それは昨日、家庭科部で作ったものだった。ナッツを生地に練り込んであるから、香ばしい風味がある。今度は自分の作ったお菓子を食べてもらえた。未明はそれだけで嬉しい気持ちになる。

テーブルには、ティディベアのすべてのパーツができあがって散らばっていた。後は綿をぱんぱんに入れた胴体に手足をつけて、ボタンの目をつけて、刺繍をするだけだ。一日もあればできてしまうはずなのに、先週は、ティディベアの耳だけつけた。今日は鼻の刺繍だけした。星一のティディベアにはいびつな形の鼻がついたが、それが愛嬌があって可愛かった。次は、くるみボタンを作って、その次の週に取りつけて……未明は、この秘密のティディベア作りを、終わらせたくないのだ。

でも、分からないことが一つだけある。星一も、そう思っているように、ゆっくり作業をしていた。

雨はカーテンのように流れている。ざあざあと微かな音が、静かな図書館に響いていて、それと同じくらいの小さい声で星一が言った。

「雨は苦手だな……」

「どうしてですか？」

「どうしてだと思う？」

しかめ面のまま、星一は自分の頭を指差した。小麦色の巻き毛。ゴールデンリトリバーみたいな、愛くるしい髪。

「天然パーマだから、ぼわぼわになるんだ」

「でも、可愛いと思います」

「そう？ そうかぁ……じゃあ、いいかな」

いいのだろうか。未明は、そっと星一の髪の毛へ手を伸ばした。つむじのあたりの、自由に跳ねる髪の毛を撫でつける。星一は何も言わなかった。黙って未明を見つめている。黒目がちの大きな目が、物言いたげに揺れる。

「平行線とは……」

星一が言って、未明は数学の問題集に視線を落とした。

「平行線とは、同一平面上で交わることのない二直線であり……」

——私と、星一先輩みたい。

「でも、どちらかが少しでも傾いてしまえば……交わる」

問題文にないことを呟いて、星一は俯いた。ばらばらのティディベアの足をもてあそぶ、その指先を未明

は見つめた。

永遠に、ティディベアは完成しなければいいのにと未明は願う。

ばらばらのまま、平行線のまま、いてくれたらいいのにと、星一に傾いている未明は思うのだった。

「あの王子様とはどうなったの？」

部活中ににんじんを切っている時、緑がそう尋ねてきた。今日は夏野菜のカレーを作る。にんじん、なす、ピーマン、たまねぎ、トマト、かぼちゃ。どれも、園芸部から貰ったものだ。

「どうって……どうも」

「うそー、だって、二人でこそこそ会ってるじゃないの」

「知ってたの？」

未明が驚いて言うと、噂になってるよ、と緑は声を潜めた。

「王子様は人気者だから、未明が彼女なんじゃないかって噂してる。どうなの？」

「私じゃないよ。だって、星一先輩には、好きな人がいるみたいだもん」

自分で言って、胸がチクリとした。

未明は数学が嫌いじゃなくなった。裁縫や料理が得意な自分を、初めて好きだと思えた。

星一といると、未明の世界はきれいな色で溢れた。好きなことを点と点で繋いで、円にする、それが広がって、全部が楽しくなる。

星一に恋をしていると、こんなにもわくわくする。でも、星一がティディベアを贈る相手は、未明ではないのだ。それを思うと、心は針でずっとチクチク刺されているみたいに痛くなった。

「その好きな人って、この学校の人？」

「知らない、聞いてない」

「聞きなよお」

たまねぎを切って涙目の緑が、がっかりしたように呟いた。

「緑ちゃん、楽しんでるね？」

「人ごとだからね！」

二人で小突き合っていると、窓の外がざわざわし始めた。

「おい……まさか……今日はカレーじゃないか……？」

「何い、カレーだと！？ 神の食べ物じゃないか……」

夏を目前にして、もうこんがり日焼けした男子生徒たちが、窓枠に群がった。

その中に星一の姿を見つけて、未明は心が高鳴った。彼は真っ直ぐ未明を見ている。彼の隣にいた男の子がそれに気付いて笑った。

「よし、星一、またあの子に勉強を教えて、皆のカレーを貰って来い！」

自分の名前を出されて、未明は恥ずかしさに顔が赤くなっていくのを感じた。勉強ができないことを皆の

前でからかわれて、逃げ出したくなる。

「無理だよ、だって未明ちゃん、もう数学得意だもん」

星一は男の子に向かってきっぱりそう言って、ね？ と、未明へ笑いかけた。

緑が頷いて言う。

「そうだよ、未明、もう数学得意だよ。ミニテストでも良い点とって褒められてたし。だからカレーはあげられません。残念でしたー」

四方八方から落胆の声が飛ぶ。未明は俯いたまま、ぐるぐるとカレー鍋をかきまぜる振りをして、そっと笑った。星一がかばってくれた。もうこの鍋のカレー全部、星一にあげたい。その日のカレーは、おいしかったけど、蕩けるように甘く感じた。かぼちゃが入っているせいだと皆は言っていたけど、自分の気持ちが溶けたせいだと未明は知っていた。

夏休みを目前にして、ティティベアは完成してしまった。座りの悪い、でも花柄がどこか誇らし気な、愛くるしいティディベアになった。

「満腹のネズミみたいな顔じゃない？」

星一がそう言って、ティディベアの顔を押す。確かにそうだと思ったので、未明も笑ってしまった。

これで、終わり。密やかな時間も、ここでおしまい。

「でも、星一先輩が一生懸命作ったから、彼女さんも喜ぶと思います」

未明はつとめて明るく言うと、星一はいきなり慌てだした。

「彼女！？」

大きな声で、未明の方が驚いてしまう。

「ち、違うんですか？」

「え、彼女じゃないし、彼女いないし……俺、このクマを、妹にあげるつもりだったんだけど……」

「そうなんですか！？」

今度は未明が大きな声を上げる番だった。勘違いだった、それで、みるみる未明は元気になってしまった。だから、星一の表情が曇っているのに気付いて、首を傾げる。

「俺に、彼女がいると思ってた？」

「はい。だって、星一先輩は王子様で、人気もあって、だから……」

尻すぼみになっていく言葉を口の中で捏ねていると、星一は拗ねるように唇を尖らせた。なぜか耳のフチが赤くなっている。

「いないよ、彼女なんていない」

はっきりと星一はそう言った。それから何となく気まずい空気のまま、未明は星一のティディベアを綺麗にラッピングしてあげた。最後に、ピンクのリボンを結ぶ。

「ありがとう」

「いえ、私も、数学を教えて貰ったから……」

ああ、終わりがきてしまった。目の奥がツンとして、涙の気配に焦ってしまう。

「……俺の妹ね、」

唐突に、星一が言った。

「本当の妹じゃないんだよ。父親の再婚相手の子供なんだ。まだ五歳で、今年の春から一緒に住み始めたんだけど、恥ずかしがりやで、全然仲良くないんだ」

彼はそう言って、哀し気に目を伏せる。

「俺も学校と部活で忙しいから、全然話してくれなくなっちゃって……。せっかく家族になったのに、それじゃ寂しいよね。ずっと、仲良くなるきっかけを探していて、ふと、キミの鞆についてたクマを見て、これをあげたいって思ったんだ。何だろう、とても優しい顔をしているように見えたから……」

それから星一は、視線を上げる。どこまでも深く澄んだ瞳が、未明を映している。

「俺は、キミが言うように、全然、完璧なんかじゃないんだよ。上手くいかないことでウジウジ悩んでるような人間だよ」

「ウジウジ悩んでなんて、いないじゃないですか。先輩は、こうして妹さんの為にティディベアを作って、妹さんのことを優しく、真剣に考えてます。星一先輩はいつも前向きで、そういうところが、私は……」

――私は。

未明はそこで言葉を切って、星一を見つめた。どうしても言えない言葉が、喉の奥で引っかかっている。星一は未明の言葉を待っていたけれど、黙ったままでいると、彼はふっと口元を緩ませた。

「ありがとう。未明ちゃんは、自分のことをダメだって言うけれど、俺は一度も思ったことがない。最初に、キミを見た時から、素敵だなって思ったよ」

「そうやって、言ってくれる星一先輩が、いちばん素敵です」

公式があればいいのに、と未明は思う。恋が上手くいく公式だ。きっと、それがあれば解ける。でも、ないことをちゃんと知っている、だから、悲しい。

終業式の日、星一に誘われて、未明は彼の家を訪ねた。二人で肩を並べて歩くのは初めてで、未明は星一のいる右側がとても熱く感じた。

「レンちゃん、喜んでくれるかなあ。あ、妹の名前、レンっていうんだけど」

「レンちゃん……喜んでくれますよ、絶対」

未明のオレンジのティディベアと、クッキーも一緒にプレゼントすることにした。彼はいつもより口数が少なく、緊張しているのか、時々、深呼吸を繰り返していた。

星一の家は住宅街にある、ごく普通の一軒家だった。家の脇には夾竹桃が鮮やかに咲いていた。

「ただいま」

「おじゃまします」

「おかえりなさい。あら……」

玄関で出迎えてくれたのは、ひよこ色のエプロンをつけた女の人だった。肩までの栗色の髪がカールした、綺麗な人だった。これが、新しい星一のお母さんなのだろう。

優しそうで、笑うときらきらするところが、血は繋がっていないはずの星一とそっくりだった。

「友達も一緒だけど、いい？」

「もちろんよ、あがって下さい。スリッパはどこだったかしら……」

そう言って、彼女は未明のスリッパを用意して、リビングに入るとお茶を出してくれた。

ソファとテーブルの間に、小さな女の子が座ってお絵描きをしていた。彼女が妹のレンだった。星一は靴からティディベアを取り出すと、レンの横へ座る。

「レンちゃん」

彼女はスケッチブックから顔を上げず、一心不乱にクレヨンを動かしている。でもそれが、幼い子特有のだんまりであることは一目瞭然だ。ぽん、とテーブルに置かれた袋を見て、レンはようやく顔を上げた。

「レンちゃんにプレゼント」

「……？」

ふっくらしたほっぺたが、ばら色をしている。レンは小さな手でその袋を掴むと、何も言わずリボンをほどいた。中から花柄のティディベアを取り出して、わっと声を上げる。

「くまさんだあ……！」

「お兄ちゃんが作った」

「……おにいちゃんが？」

未明はそばに突っ立ったまま、二人のやりとりを見つめていた。未明まで緊張で喉がカラカラになる。星一の横顔はきりりと引き締まっている。

「レン、良かったね。ありがとうは？」

母親が柔らかくそう言うと、レンはもじもじしたまま、こくと頷いた。

「ありあとう……」

「どういたしまして」

ホッと、星一が息をつく。安堵の色を頬に浮かべて、未明を見上げてピースサインをする。それで、未明もすっかり嬉しくなった。二人はティディベアを挟んで、ぽつぽつと会話を始めた。仲良くできないと悲し気に言った、彼の姿はどこにもなかった。誰にでも優しい、いつもの王子様だった。

未明もプレゼントを渡して、三人でお絵描きをする頃には、二人は本当の兄妹のように、すっかり打ち解けていた。

未明も一緒に夕方まで遊んで、星一の家をお暇する。

「本当に、ありがとう」

送って行く、と言った星一に、未明は首を振る。

「大丈夫です、私の家もここから近いので」

「でも……」

「レンちゃんと、仲良くなれて良かったですね」

微笑むと、星一も笑った。

「キミのおかげだよ」

星一は、妹にちゃんと気持ちを伝えた。でも、未明はできない。意気地なしなのだ。前向きな王子様と、後ろ向きな自分。いつだって背中あわせだった。

「あのね、未明ちゃんに貸したい本があるんだ」

「本？」

彼は後ろ手に持っていた一冊の本を未明に押しつけた。小川未明の本だった。童話の詰まった短編集なのだという。

「ありがとう。大切に読みます」

「うん。きっと、気に入ると思うよ」

「じゃあ、さようなら」

「うん、気を付けて。また……未明ちゃん、またね」

また、いつか。夏休みは、明日からだ。ああ、終わりだと未明は、茜色の空を見上げた。この本を返す時までに、未明はこの恋心をなくしてしまおうと思いつく。夏休みいっぱいをかけて、平行線に戻すのだ。金星がぴかぴか輝いている。それが滲んで、未明は慌てて目元をごしごしと擦った。手に持った本を開く

と、そこには一枚、手紙が挟まっていた。

宛名もない、白い封筒だ。開けてみて、未明は思わず後ろを振り返った。

そこには星一が、息を切らして立っていた。さすがに、インターハイに出るだけある。未明は感心して、笑う。ふわふわの髪の毛が、愛しくあちこち跳ねている。

「やっぱり、送ってく！」

「.....手紙の返事、今してもいいですか？」

「俺、未明ちゃんのことを好き」

「私も、星一先輩のことを好きです」

果てしないわ、と未明は呟いた。果てしない平行線が交わった、未明は、童話のお姫様になれた気がした。